

失敗を繰り返さないための三つの提言

大学入学共通テストの検討会議始まる

石田かおる 2020.1.13 16:00 [AERA#AERA オンライン限定](#)



紅野謙介さん、南風原朝和さん、羽藤由美さん(左から)。大学入試改革の問題提起をしてきた専門家3人が意見を交わした(撮影／写真部・小山幸佑)

大学入試のあり方に関する検討会議委員(予定)

(有識者委員)

荒瀬 克己 大谷大学文学部教授
川嶋太津夫 大阪大学高等教育・入試研究開発センター長(特任教授(常勤))
齋木 尚子 公益財団法人日本ラグビーフットボール協会理事、
前外務省研修所長(元同国際法局長・経済局長)
穴戸 和成 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所理事長
島田 康行 筑波大学人文社会系教授
清水 美穂 筑波大学大学院教育研究科長・教授
末富 芳 日本大学文理学部教授
益戸 正樹 UjPath 株式会社特別顧問、株式会社肥後銀行社外取締役
○三島 良直 東京工業大学名誉教授・前学長
向角亜希子 東京大学大学院教育学研究科准教授
渡部 良典 上智大学言語科学研究科教授

○座長

(団体代表委員)

岡 正朗 山口大学学長、一般社団法人国立大学協会入試委員会委員長
小林 弘祐 学校法人北里研究所理事長、日本私立大学協会常務理事
芝井 敬司 関西大学学長、一般社団法人日本私立大学連盟常務理事
柴田洋三郎 公立大学法人福岡県立大学理事長・学長、一般社団法人公立
大学協会指名理事
萩原 聡 東京都立西高等学校長、全国高等学校長協会会長
吉田 晋 学校法人富士見立学園理事長・富士見丘中学高等学校校長、
日本私立中学高等学校連合会会長
牧田 和樹 一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会会長

(オブザーバー)

山本 廣基 独立行政法人大学入試センター理事長

検討会議の委員のメンバー／文科省のサイトから

大学入学共通テストの二本柱といわれてきた、英語の民間試験と国語・数学の記述式の導入が頓挫したことを受け、「大学入試のあり方に関する検討会議」の初会合が1月15日に開かれる。押さえておくべきことは何か。3人の専門家が意見を交わした。

● 鼎談参加者

南風原朝和(はえばら・ともかず):東京大学名誉教授。広尾学園中学校・高等学校長。日本テスト学会副理事長。専門は心理統計学、テスト理論。東京大学理事・副学長、高大接続研究開発センター長などを務めた

羽藤由美(はとう・ゆみ):京都工芸繊維大学教授。専門は応用言語学。コンピューター方式のスピーキングテストを開発し、同大の英語プログラムやAO入試で実施している

紅野謙介(こうの・けんすけ):日本大学文理学部教授、学部長。専門は日本近代文学。筑摩書房高等学校用国語教科書編集委員。著書に『国語教育 混迷する改革』(ちくま新書)など

※ ※ ※

——検討会議がいよいよ始まります。英語の民間試験と国語・数学の記述式の導入を土壇場で見送るような、同じ失敗を繰り返さないために最初に押さえておくべき大事なポイントは何でしょうか。

南風原:「手段」と「目的」を取り違えないことです。英語の民間試験について、多くの課題が解決しないなか東京大学は「民間試験の受験を必須としない」方針を打ち出しました。当時、中心的な役割を果たした元理事・副学長の石井洋二郎さんが、最近出された本『危機に立つ東大——入試制度改革をめぐる葛藤と迷走』の中で、「今回の改革が失敗したのは、手段のひとつにすぎないものが目的にすり替わったからだ」と書いていますが、まさにその通りだと思います。

——検討会議の「検討事項」は、(1)英語4技能評価のあり方(2)記述式出題のあり方(3)経済的な状況や居住地域、障害の有無等にかかわらず、安心して試験を受けられる配慮(4)その他大学入試の望ましいあり方、となっています。

南風原：英語4技能評価や記述式問題は、「高校生の英語力を伸ばす」とか「思考力・表現力を育てる」という大きな目標のための手段の一つにすぎません。検討事項の(1)(2)が導入を前提とした議論になるとしたら、同じ失敗を繰り返します。目標を達成するための手段はほかにも考えられるわけで、まずは共有できる「目標」を明確にすることから始めるべきです。

紅野：私も同感です。会議の名前は「大学入試のあり方に関する検討会議」となっているわけですから、改革を通して何を目指していたのか。その再確認が大事です。4技能評価や記述式問題を「技術的にいかに導入するか」といった方向に議論を矮小(わいしょう)化するのは避けてほしいです。

羽藤：検討事項(3)は「格差への対応」です。英語の民間試験は、萩生田文部科学大臣の「身の丈」発言がきっかけで見送りとなりましたが、問題はそれだけではありません。営利を目的とする事業者に試験の運営を丸投げするという構造的欠陥がありました。その結果、入試に求められる公正性や公平性がないがしろにされ、全員が受験できる見通しさえ立ちませんでした。委員会では、民間試験の利用を前提とせず、何のための民間試験導入か、民間試験導入でその目的が本当に達成できるのかをまず確認していただきたい。

紅野：国語や数学の記述式について言うなら、大学入試センターの山本廣基・理事長もコメントしているように、50万人規模の答案の採点ミスゼロにすることは不可能です。先ほど南風原先生もおっしゃったように、生徒たちの「記述力」や「表現力」を高めたいのであれば、方法はほかにいくらでもあります。

——共通テストの過去の審議では、専門家や現場の声に耳を傾けてこなかったことの問題も指摘されています。

紅野：国語の記述式試験を経験している教員であれば、それがいかに大変で、50万人規模の実施は不可能だということを経験則としてわかっています。しかし、そうした現場の声に耳を傾けられなかったことが、見送りを大幅に遅れさせ、さらなる混乱を招きました。

羽藤：検討会議の委員が18人選ばれていますが、このメンバーでいま求められる議論や判断がすべてできるのでしょうか。これだけ大きな問題となったわけですから、なぜその方々を委員に選んだのか、萩生田大臣にはきちんと説明する責任があると思います。

——大臣は会見で、幅広く意見を聞き、必要に応じて、分科会の設置も考えていると述べています。

羽藤： 関連分野の専門家や現場を知る人たちをどんどん呼んでほしい。これまでのように、「即戦力の人材を」「英語が使える人材を」といった財界の一方的な注文をそのまま教育の現場に降ろしてくるのはやめてほしい。総授業時間、クラスサイズ、教員の手間や力量・意識などの現実を踏まえ、エビデンスと照らした現実的な議論をしなければ、同じ失敗を繰り返します。

南風原： 失敗の検証も大事です。今回、何が起きたのか。なぜ起きたのか。多くの人が技術的に不可能だと思っても、なぜ止められなかったのか。その検証抜きに進めてはいけません。

羽藤： その通りですね。大混乱に至った経緯を徹底的に検証していただきたい。

南風原： 私が文部科学省の「高大接続システム改革会議」の委員をしていたときに、記述式の採点にコンピューター技術を活用する試みもなされました。問題が多く頓挫しましたが、それらを含め、「何ができて、何ができなかったのか」の整理が不可欠です。

——検討のスタートにあたっては、まず「目的と手段を取り違えず、目標を確認・共有すること」「専門家や現場の声を生かすこと」「失敗の検証」の三つが大事だということですね。

羽藤： 検討の期間は1年とされていますが、とても1年でできるとは思えません。結論ありきにならないように、期限を区切らず本質的な議論が積み上げられることを願っています。

(文／編集部・石田かおる)